

グスク出現前後の考古学研究史とその論点の整理

宮城, 弘樹

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

37

(開始ページ / Start Page)

215

(終了ページ / End Page)

265

(発行年 / Year)

2011-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007281>

グスク出現前後の考古学研究史とその論点の整理

宮城 弘樹

第1章 はじめに

本論は、沖縄諸島の先史時代からグスク時代をテーマにした考古学研究を、近年の研究動向を中心にレビューするものである。沖縄諸島では先史時代の終焉は貝塚時代後期、先島諸島では無土器時代、奄美諸島では研究者によってその呼称方法が不統一であるが、本州や沖縄諸島の時代呼称を援用している。「グスク時代の開始」についてもそのとらえ方については、研究者間で若干の相違がある。いずれにしても、大画面となる両時代の考古学研究を概括することを第一の目的とする。研究史を概括した上で課題点を明らかにし、今後行われるべき当該テーマの論点について整理することを第二の目

的とする。

沖縄諸島の先史時代の呼称は、一般的には貝塚時代の呼称が用いられる（沖縄考古学会一九七八）。一方、高宮廣衛によつて先史時代を新石器時代と呼称し前・後期の二期に区分され、これは暫定編年と呼び慣わされている（高宮廣一九七八）。貝塚時代中期以前、暫定編年前期は縄文時代との並行関係を重視しながら、編年的枠組みを再構築する手法が用いられている。いずれも日本本州との並行関係を基軸にしながらも、それとは異なる独自の編年を採用している点で共通する。両編年における「後期」は本州における弥生時代から奈良・平安時代と並行する時代である。本論では一般的に沖縄で広く採用されている貝塚時代後期で時代呼称を統一して紹介していく。

この貝塚時代後期の文化は、本州弥生時代から奈良・平安時代に並行する。ただし、亜熱帯島嶼地域における地理的特質などから、本州の文化とは異なる独自の文化を育んできたことが明らかとなっている。また、本州弥生・古墳文化との少なくない接触・交渉があつたことが確認されているものの、在来文化自体は日本本州から見ると、北海道とともに異なる歴史的位置付けとする評価が一般化しつつある（藤本一九八八）。

一方、次代のグスク時代は、①本格的な農耕や家畜飼育の社会への移行。②金属器の使用とその普及。③中国を主にした対外貿易の活発化。④先島諸島との文化的統一（嵩元・安里一九九三）の時代として説明されている。歴史学では「沖縄の歴史上大きな転換期として、琉球王国を形成せしめる画期

だった(高良一九八七)」と総括されている。

貝塚時代の役割及びその終焉は、グスク時代への刷新という歴史叙述とともに多くの研究者によって紹介され、またその主因について論及されてきた。しかし多くの場合は、グスク時代開始への関心であり、貝塚時代の終焉を含む歴史過程についての検討は意外に少ない。そこで、これまで貝塚時代の終焉とグスク時代のはじまりがどのように研究されてきたのかについて先ず概観し、次に論点や課題点について順序立てて紹介する。

第2章 研究史の概観

一 はじめに

琉球列島史において「貝塚時代後期」の位置付けは、一方では日本本州との文化的相対化の中で、もう一方では前後の縄文時代並行期やグスク時代との相対化の中でその基本的な枠組みがつけられてきた。またグスク時代も同様に前後の異なる時代との相対化の中で議論されてきた。当然、両者には長い研究の歴史がある。

両時代の研究は大きく五つの研究段階を経て進展してきたと考えられる。それぞれに研究の着手された年代には研究された時期の相違も認められるが、次のような段階を設定した。第1期「黎明期の

研究」。第Ⅱ期「調査の開始」。第Ⅲ期「それぞれの文化核心の検討」。第Ⅳ期「文化史の再評価」。第Ⅴ期「社会論及び島嶼間における地域史を導入した重層的理解への研究」とそれぞれの研究段階で研究を進展させている(表1)。次節以降、両時代を横断する移行期における研究について、それぞれの研究段階でどのように論究されてきたのかを確認していく。

さて、研究史の第Ⅰ段階であった、第Ⅰ期「黎明期の研究」においては移行期の研究はほとんど見られない。歴史資料や伝説などに依拠した、古層の沖繩からの移行を論じる研究が無いわけでもないが、総じて貝塚時代後期遺跡の発見が無い中では、実証的でないというのが現状なので省略する。

二 第Ⅱ期「調査の開始」

沖繩諸島を中心に本格的な考古学的調査が行われはじめるようになると、貝塚時代後期からグスク時代への移行についての研究は、一九五六年多和田真淳によつて著された「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」の中に見ることができると。多和田は、波状口縁の土器から壺形、平口縁の土器の変化期について「狩猟採集文化から農業文化への移行と平行したのではないかということである。之は単なる想像ではなく必ずや将来証明される時期がくるであろう事が期待される。(多和田一九五六)」と述べ、現在の貝塚時代中期頃(縄文時代晩期並行期)に起こる土器文化の変容を農耕文化への移行として捉

表1 貝塚時代後期からグスク時代研究史の対比表

沖繩後期の考古学的研究史	グスク時代の考古学的研究史
<p>I期(黎明期)～1956</p> <p>1930 山崎五十廣：弥生土器系統の指摘</p> <p>1937 角田文衛：南島の土器に弥生的な面を指摘</p> <p>1935 三宅宗悦：石包丁の未発見を論及</p> <p>1950 八幡一郎：本土の弥生・古墳文化が到来しない</p>	<p>I期(黎明期の研究)～1924</p> <p>1853 ベリーの探検隊が中城城跡測量調査を実施</p> <p>1877 伊地知宜賢『沖繩興地誌略』にて首里城など紹介</p> <p>1899 那原道『南島興地誌略』グスクの通史的紹介</p> <p>1901 田山花袋『琉球名勝地誌』グスクを紹介</p> <p>1909 東恩納實徳：グスクの語源を「御石」と解釈</p> <p>1923 真境名安興・倉倉龍治『沖繩一千年史』刊行</p>
<p>II期(後期遺跡の考古学調査の開始期) 1956～1968</p> <p>1956 多和田真淳：琉球列島の貝塚分布と編年の概念</p> <p>1958 多和田真淳：沖繩で弥生土器発見を期待</p> <p>1963 友寄英一郎：『貝志原貝塚』を発掘</p> <p>1965 高宮廣吉：沖繩後期に古墳文化の不在を明示</p>	<p>II期の研究(グスクの考古学的調査の開始期) 1924～1961</p> <p>1924 伊東・鎌倉 首里城跡内の発掘調査(伊東・鎌倉1937)</p> <p>1926 伊波普猷『琉球古今記』グスクの機能差を論ずる</p> <p>1927 田村浩：グスクと村落の関係について論及</p> <p>1942 島羽正雄：沖繩の城を時期区分、分類を行う</p>
<p>III期(弥生文化の到来の検討) 1968～1987</p> <p>1968 貝志原貝塚における弥生土器の初見(友寄・高宮)</p> <p>1970 友寄英一郎沖繩出土の弥生土器紹介</p> <p>1970 九州の各貝製品をゴホラであることを見現</p> <p>1973 高良倉吉：考古学的成果を中心に総括</p> <p>1974 安里進：沖繩における原始共同体の解体過程</p>	<p>III期(グスク論争とグスクの本格的発掘の着手) 1961～1973</p> <p>1956 多和田真淳：琉球列島の貝塚分布と編年の概念</p> <p>1958 八重山の考古学調査『八重山』刊行</p> <p>1961 仲松弥秀『グシク』考発表</p> <p>1964 勝連城跡の本格的発掘調査スタート</p> <p>1965 高宮廣吉：城時代を提示</p> <p>1967 多和田真淳『琉球古代の鉄の輸入』</p> <p>1969 フェンサ城貝塚の調査</p> <p>1969 安里進：炭化米、炭化大豆報告</p> <p>1969 藤元政秀：グスクについての試論。集落説を説く</p> <p>1970 『南島考古』創刊号</p> <p>1970 佐藤伸二『南島の須石器』『沖繩の社会と習俗』</p> <p>1973 高良倉吉：グスク解釈を時間的に整理</p> <p>1974 安里進：沖繩における原始共同体の解体過程</p> <p>1975 友寄英一郎『西グシク考』</p>
<p>IV期(後期文化評価へ) 1987～2004</p> <p>1987 独自の文化を築いた沖繩を紹介(田中1987)</p> <p>1988 藤本強『もう2つの日本文化』刊行</p> <p>1989 木下尚子『南海東洋の研究』(木下1989)。</p> <p>1992 鹿儿島沖繩合同学会「弥生土器」テーマに開催</p> <p>1995 高宮廣吉：開元遺棄出土の意味を考察</p> <p>1996 在美地域の弥生土器検討(中村・上村1996)</p> <p>1997 弥生時代並行期の在り地土器に編年を提示(宮城)</p> <p>1998 搬入土器に關し南九州と比較(中興・上村1998)</p> <p>高宮広土：ナガラ原貝塚発掘の植物遺体をコマと判定。→その後否定(木下2002補遺編)</p> <p>1999 下地安宏：美里系土器の発見を報告</p> <p>1999 新里貴之：南西諸島の編年観とみる</p> <p>1999 国立歴史民俗博物館「新弥生土器」開催</p> <p>2000 岸本義彦ほか：沖繩の在り地土器を通史的に概観</p> <p>2000 安里進：弥生系土器の研究</p> <p>2000 木下尚子：開元遺棄の問題を整理</p> <p>2001 新里貴之：交易ネットワークについて考察</p>	<p>IV期(グスク時代史の研究へ) 1973～1997</p> <p>1977 當眞嗣一：中城城跡との比較検討の必要性を説く</p> <p>1978 沖繩考古学会「石器時代の沖繩」新里貴之。発行</p> <p>1980～現在：今帰仁城跡の本格的発掘調査開始</p> <p>1981 カムイキヤキ跡跡の発見</p> <p>1982 『ぐすく(Ⅰ)』発行。沖繩球誌</p> <p>1983 安里進『グスク時代＝古琉球論』</p> <p>1985 ～1987首里城跡正殿発掘調査</p> <p>1985 安里進：近世琉球の農業共同体の起源発表</p> <p>1985 沖繩県立博物館にて特別展「グスク」開催</p> <p>1987 ～1988安里進：琉球一時代区分をめぐる問題を総括</p> <p>1989 『ぐすく(Ⅱ)』発行。宮古誌</p> <p>1994 『ぐすく(Ⅲ)』発行。八重山誌</p> <p>1995 高宮廣吉：開元遺棄出土の意味を考察</p> <p>1996 名嘉正八郎『図説 沖繩の城』那覇出版社</p>
<p>V期(貝塚後期の社会論の展開) 2004～現在</p> <p>2004 『考古資料大観』12 貝塚後期文化 刊行</p> <p>2005 高宮広土『島の先史学』(高宮2005)</p> <p>2005 高梨修：奄美のヤコウガイ交易と土器編年整理</p> <p>2005 新里貴之：南西諸島の先史時代集約整理</p> <p>2005 木下尚子：貝塚時代後期の文化的位置付け考察</p> <p>2006 先史琉球の生業交易を中心に研究(熊本大学)</p> <p>2009 新里貴之：『貝塚後期文化と弥生文化』</p>	<p>V期(グスク時代史における社会論と地史学の進展) 1997～現在</p> <p>1997 高梨修：奄美におけるグスク研究のバースベクティヴ</p> <p>1997 當眞嗣一：土より成るグスク発表</p> <p>1997 三木靖：奄美のぐすく(Ⅲ) 紹介</p> <p>1999 小野正敏：先島の村落検討</p> <p>1999～2000山本正昭：グスク時代の石積田について検討</p> <p>2001 名瀬市教育委員会：グスク詳細分布調査報告</p> <p>2003 山本正昭：宮古地域におけるグスク相当遺跡を紹介</p> <p>2004 『グスク文化を考える』刊行</p> <p>2005 高宮広土『島の先史学』(高宮2005)</p> <p>2005 安里進『三つのグスク論』</p> <p>2007 坂井隆『東南アジアの城郭—グスクへの試論—』</p> <p>2007 『東アジアの古代文化』130号刊行</p> <p>2008 『古代中世の境界領域』刊行</p> <p>2008 『日琉交易の黎明—ヤマトからの衝撃—』刊行</p>

両時代の移行期を扱った主な研究

え私見を述べている。加えて「琉球の金石併用時代は何時頃から始まったのか今のところ不明であるが、大体後期の終末期頃、各地に（中略）支配者の出現と同じ（多和田一九五六）」として、貝塚時代後期からグスク時代（多和田編年晩期）の変化の文化的背景に、按司の出現などを想定している。

一九六五年高宮廣衛は「沖繩（古墳文化の地域的概観）」の論文の中で「按司の出現と城の起源が符合するかどうかは不明だが、按司発生の母体は少なくとも貝塚時代にさかのぼらせて考える必要がある。貝塚時代以後城が突如としてあらわれたというよりも、貝塚時代に出現した首長がしだいに成長してゆく過程において城の体裁がととのい、ついには現在みるような石の城郭をもった城の出現とすることになるのではないだろうか。（中略）二・三の後期貝塚には消極的な資料であるが、城の出現を暗示させるものがある。城の出現または変遷の原因として外来の刺激もあつたかもしれないが、徴すべき資料がない（高宮廣一九六五）」と述べている。

このように多和田、高宮を代表とする考古学研究者によって示されたのは、いずれも按司出現の契機を貝塚時代に遡らせた考え方であり、農耕の開始や鉄器の出現などが、時代の社会変化とともに現れるだろうとして注視すべき資料をあげたものであつた。

三 第三期「文化核心の検討（弥生文化到来の検討、グスク論争）」

グスク論争によって、グスクの性格に関する諸説が学会において争点となった。考古学の調査成果から一石を投じた嵩元政秀は一九六九年に「グスクについての試論」を著し、グスク＝集落説を説いた。論文中でグスクをA・B・C式の三つの分類した上で、「この時代（グスク時代）は正に沖繩の歴史上、最初の大きな転換期であったと云える。外来文化を主体的、継続的に大量に摂取した時期であり、須恵器、青磁の伝来、金属器の使用、牛馬の飼育、農耕、どれを一つとっても大事件である。これは長く続いてきた伝統的な採集主体の経済社会を解体し、新たな本格的な生産経済社会を形成しつつあった（嵩元一九六九）」と述べた。そして、「従来、沖繩の農村村落の発生について、丘陵地の背後又は麓に村落を創設し、その丘陵地に御嶽を設定したとする見解が一般的であるが（中略）このような村落創設形式に先行する村落として、丘陵地そのもの（グスクB式）があり、それが後年、グシクという不便な居住地に住む必要が無くなってくるとその居住地をグシクの麓へと移行していったと推測される。この動向は、支配者としての按司発生とも重要な関係があったであろう（嵩元一九六九）」と述べている。このようなグスクの発生の下敷き、あるいはグスク時代への移行においてグスクB式という「原始社会の終末より古代社会へ移行する時期頃の防壁された又は自衛意識をもって形成された集落（嵩元一九六九）」があるとして、遺跡の時代的、歴史的位置付けを行った。更に嵩元は「沖繩における原始社会の終末期（嵩元一九七二）」において、最新の考古資料や歴史学との整合についても持論を展開し、論を発展させている。

このような考古学的成果を受け歴史の枠組みを構築したのが、一九七三年に提出された高良倉吉「沖縄原始社会史研究の諸問題」であった。高良は歴史学の立場から考古学的成果を引用し歴史像を提示した。高宮によって時代設定されたグスク時代（設定当初は城時代）は、嵩元、高良、後述する安里によって七〇年代にはほぼ現在知る時代概念がつくられた。一九七四年に安里進は「沖縄における原始共同体の解体過程（試論）」において貝塚時代後期からグスク時代への社会発展を素描している。時間的位置付けには、現在の編年観との齟齬も認められるものの、総じて社会動態を段階的に設定し通史した点では代表的な研究に位置付けることができる。多くの論点と指摘を含むため、やや長文だが引用しておきたい。「貝塚時代）後期における技術の発達と人口増加は次第に採取経済の矛盾を顕在化させていったのであろう。後期後半には、この矛盾の進行に一層拍車をかけた浅海化現象があった。（中略）後期後半以降の矛盾の顕在化という事態に対処して、漁労共同体内部の規制を強化し、乱獲を防ぎ自然の保護に努める一方、食料不足を補うために植物資源への依存度を一層強めていったに違いない。こうして後期後半には、伝統的生産基盤であった漁労生産から、農耕を基礎にした生産経済へ転換する主体的条件が形成されつつあったと思われる」として、人口増加が貝塚時代社会の解体への主因と指摘している。更に、「ウタキ集団は農業生産の発達を背景に漁撈共同体的紐帯を断ち切り土地を媒体とする新しい共同体を形成していったのであった」、加えて「（ウタキ）共同体は、原始社会から階級社会への過渡期として考えられているグスク時代に耕地を基盤に地縁的に結

びついでおり、また共同開拓地（共有地）の平等分配を行うためのウタキ集団への耕地割替といった状態も想定しうることから、原始共同体の最後段階としての農業共同体として把握しうるであろう（安里一九七四）」とまとめる。安里のこのような社会発達論は、時代や共同体の名称あるいは年代観等を若干修正しながらも以後も、大枠としては貝塚時代後期社会からグスク時代への移行を発展段階的な社会変化として描いていくところとなる。

四 第四期「文化史の評価（後期文化の評価をめぐる研究、グスク時代史の研究）」

一九八一年のカムイヤキ古窯の発見は、グスク時代史を紐解く上で極めて重要な発見となった。また、一九八七年の藤本強の『もう二つの日本文化』における貝塚時代後期の日本列島における位置付けは、貝塚時代後期からグスク時代のそれぞれの位置付けを改めて見直すきっかけとして、また両時代の移行期の再構築を迫るものとなった（藤本一九八七）。同年安里進によつて「琉球—沖縄考古学的時代区分をめぐる諸問題」が発表されたことも、このような琉球諸島の文化史を再評価する一つの代表的研究としてあげることができる。安里進は移行期について論文中で以下のように紹介している。

「くびれ平底期には海浜砂丘地に立地した遺跡に見られるように非防御的な遺跡が出現しそして次第に増加していく。この頃は、律令国家による「南島経営」の時期でもあった。南島経営は、文献史

料によつて知られていたが、最近、大宰府で八世紀前半の「奄美嶋」（奄美）と「伊藍嶋」（伊良部）と墨書された木簡が発見され、考古学的に確認された。この南島経営は、奄美・沖繩に一定の影響を与え、次の濶底土器成立の条件を形成していったものと思われる。次ぎに、沖繩貝塚後期的な海浜立地の遺跡がまだ広く残存している十〜十一世紀に、濶底土器が成立しそして亀焼窯も出現するという文化的、経済的変化がおこった。先に述べたように、濶底土器の成立に文化的変化と農耕社会の成立が看取されるのである。徳之島の亀焼は、奄美から先島にいたる琉球列島全域に流通し、それとともに異文化圏であつた先島をも濶底土器圏に包摂して琉球文化圏を形成していった。この十から十一世紀の変革は、九州の影響と見て良い。濶底土器の鉢は明らかに九州の石鍋の影響を受けているし、亀焼窯も九州の須恵系にその技術的系譜の一旦が辿れるようになってきた。この時期には奄美では黒色土器が搬入され、あるいは大宰府の「主厨司」と推定される海の中道遺跡では、石灰岩生産に用いられたと考えられる珊瑚の集積が発見されているが、この珊瑚はやはり南島から搬出されたものである。南島経営後続き九州と南島の交通が行われ、その影響下で文化的経済的変革が行われたものと思う。そして十三世紀には、従前のグスク的遺跡に比べて飛躍的な発達を遂げた野面積みの大型城塞的グスクが出現した（安里一九八七）」としてまとめている。

ここには、嵩元が指摘した、非防御的集落から防御的集落、やがて大型の城塞的グスクの集落、城塞の変化過程と同調的な見解を示している。加えて大宰府発見の木簡を紹介しながら、南島経営の影

響の問題や、変革期としての十～十一世紀、その影響起点としての九州の存在を有力視している。

五 第V期 「社会論及び各島嶼史を導入した重層的理解への研究（社会構造史や地域史の深化）」

一九九〇年代の後半になると、従前より指摘されてきたグスク時代史の一元的な解釈、即ち琉球王国形成史に収斂されるグスク研究の批判と克服のための具体的な例が示される。代表的な論としては一九九七年の高梨修による「奄美地域におけるグスク研究のパスpekティブ」（高梨一九九七）、小野正敏らの先島地域における研究（小野一九九九）をあげることができる。これら沖繩諸島の北と南の地域における研究から示された沖繩を中心とするグスク研究に関する疑問は、グスクを更に重層的に理解していくための下敷きとなっていくこととなる。

一方、貝塚時代後期においては、奄美地域における新発見遺跡が脚光を浴びる。それが一九九一年のマツノト遺跡、一九九七年のフワガネク遺跡の発掘であった。その後、これらの遺跡と類似遺跡の再評価を高梨修が行い（高梨二〇〇〇）、特にヤコウガイ大量出土遺跡はこの時代の社会や文化の理解へ再考を迫る内容となっている。マツノト、フワガネク両遺跡の報告書の刊行が二〇〇三年以降であったこと、また沖繩諸島における同時代遺跡の類例に乏しいことなどから両地域の比較が充分に行われていない点もあるが、今後更に研究の進展が期待されると言える。

これに加えて二〇〇二年に喜界島城久遺跡群の本格的な発掘調査が開始され、これまで琉球列島ではあまり類を見ない遺構が検出され、また貿易陶磁器等の出土状況も特異なものであった。これらの資料の解釈は、各研究者によって諸種の見解が示されており、琉球列島の歴史の再構築を迫る内容として注目を集めている。

以上の事由から、ここでは城久遺跡群の本格的発掘調査となった二〇〇二年、あるいはマツノト、フワガネク遺跡の正式報告書が刊行される二〇〇三年以前に移行期に論究した論文を幾つか挙げ、次いで喜界島城久遺跡群の発見を契機とする、沖縄諸島のグスク時代移行期に関する再評価に関する論考を見ていきたい。

(1) 第Ⅴ期 a (一九九〇年代～二〇〇〇年はじめ)

一九九五年に高宮廣衛によって著された「開元通宝から見た先史終末の沖縄(高宮廣一九九五)」は、後の研究に大きな影響を与えている。高宮は一貫して先史時代終末期におけるグスク時代への胎動を示唆し続けている。それをうかがい知る考古資料として開元通宝をあげ「開元通宝と按司の出現(予察)」を著している。この中で按司出現の背景にあつたと想定する経済活動を開元通宝の出土状況から予察した。武器(金属製品)の出土についても「初期的支配者層の出現と関連するべき資料(高宮廣一九九七)」としている。その後も南西諸島に限らず広く台湾、韓国、日本本州の事例を収集し論

を充実させてきた（高宮廣ほか一九九六、二〇〇〇）。

これに触発されて、貝交易と開元通宝との関係を唐朝と結びつけたのが木下尚子であった。木下は高宮の研究を受け、日本本州における開元通宝の集成を行った結果、沖縄への偏在を明らかにし、その招来の背景について中国大陸との関係を支持、ヤコウガイを求めて唐朝の人々によってもたらされたと説いた（木下二〇〇〇a）。これらの一連の研究によって、グスク時代を遡る先史時代における対外交渉の特異性が明らかにされた。なお、これらの研究の方向性をうかがう一端として、二〇〇一年に高宮廣衛を議長として、「七〜十二世紀ごろの琉球諸島―グスク時代前夜」というテーマのもと研究会が開催されている（高宮廣二〇〇一）。学際的研究によるアプローチにより、当該期の研究を推進するとともに、これまでの本土から南島間の問題に終始する研究から、東アジア諸国（具体的には中国、韓国、台湾といった地域）を視野に入れた研究を加味することを提言している。後者の国際的な視点による比較文化論は、南西諸島史研究の中においては、金関丈夫、国分直一、三島格、リチャード・ピアソンによる先駆的な業績がある。四氏は早くから大陸や周辺島嶼地域を含めた先史時代の文化比較を考古遺物を用い論じている。しかし、移行期の研究の中で比較研究という点が示されているのは今世紀になってからである。

安里進は一貫して琉球王国形成の下敷きとして、発展段階的な貝塚時代後期文化の伸長を論じてきた。二〇〇二年に提出された論文でも基本的な変更はないが、フワガネク遺跡などを引用しながら、

近年の最新成果を踏まえて交易システムの発達を論の一つに加えている。高梨修や木下尚子によって展開されているヤコウガイ交易に呼応する論調にも見られるが、日本本州との交易とその交易の元締め的な存在としての奄美における優位性を説く高梨に対し、沖繩諸島にもヤコウガイ交易の主導を示唆する安里では資料解釈における相違を指摘することができる。

さて、安里は貝塚時代後期前半のゴホウラ・イモガイの交易段階と後半のヤコウガイ交易段階の二つの段階を設定し、「後期前半（弥生時代）には、集落単位ないしは漁労共同体単位で行われた（安里二〇〇二a）」とし、後期後半を「ヤコウガイを大量に集積して貝匙を製作し、あるいは螺鈿素材に加工する大工房が出現する。ヤコウガイ交易では各集落が採集したヤコウガイを生産拠点に集積して加工するシステムが成立していたと考えられる」として通史している。また「このシステムをコントロールするべき首長の存在を想定しないわけにはいかない。貝塚後期後半には、勝連グスク南貝塚や具志川グスクの下層期など、後の城塞的グスクと重複した防御的立地のグスク的遺跡が登場するが、これらの遺跡に交易共同体の首長の館があった可能性がある」として供給側のシステム、主宰者についても論究する（安里二〇〇二a）。

二〇〇三年には、『日本の時代史』の中で前述の交易社会の発達史に加えて、グスク文化の形成期Ⅱ「原グスク時代」と大型グスクの出現期Ⅱ「大型グスク時代」を設定し、前者には「日本商人による交易活動の展開を契機に、琉球列島の経済と文化そしてヒトも大きく変化していった。（中略）グ

スク文化の成立を境に琉球列島人の形質も日本化の波を受けたことが明らかにされている。しかしこれは土着の先史人を上回る大集団が九州から渡来して先史人を駆逐していったことを意味しない。(中略)恐らくグスク文化形成期に何度も渡来と定着を繰り返してきた商人や鍛冶職人、陶工などの中世日本人が、琉球列島の先史人と混血を重ねる過程で、次第に渡来者の血を引き継いだ子孫が増大していったのではないか(安里二〇〇三)」として、時代の幕開けに少なくない渡来人の存在を想定している。後続する時代であるグスク時代にもほぼ同じようなことをイメージしている(安里一九七八、安里・土肥一九九九、安里・山里二〇〇六)。

吉岡康暢は二〇〇二年に著した「南島の中世須恵器―中世初期環東アジア海域の陶芸交流―」において、カムイヤキの編年を体系化するとともに、カムイヤキ窯跡の開窯の契機とその歴史的位置付けについて論究している。カムイヤキ窯跡の開窯について「奄美における在地支配層の成長をうかがわせ、カムイ開窯が窯構造の近似する肥後南辺(人吉盆地)をとりこんだ南九州勢力の主導下に進められたとしても、在来土器工人および補助労働力の編成などを前提として、在地支配者層との連携が不可分だったことは贅言を要しまい。そのことは、カムイ焼と鉄器、石鍋、中国陶磁器の大流通を管掌する支配者層の成長、農耕牧畜の新たな展開に支えられた政治社会形成の大幅期(貝塚時代からグスク時代へ)の幕開けを告げる物証とする安里進の総括的な展望とおおづかみに整合させて考えてみることができる(吉岡二〇〇二)」とする。また開窯の契機に伴って「第1にカムイ開窯を契機に、貝

塚時代に独自の生活圏を形成してきたトカラ、琉球、先島のエリアを越えた琉球海域全域にカムイ焼の流通圏が形成され、列島に連動した中世的食器様式へ転換し、農耕・牧畜の普及と按司層の成長に支えられたグスク時代開幕の指標となること。第2に、中世初期に肥後南辺を含む薩南に、博多・大宰府に交易機能が集約される前段階に中間寄港地が所在した可能性が強まり、かつ琉球列島との交易活動の中継でもあったとみられること。第3に、南薩平氏勢力を核とする在地勢力の成長と結集が進み、大宰府、肥前の武士団とも連携しつつ自律的な政治・経済圏が形成されたことが推定された（吉岡二〇〇二）¹として三つの要点を示している。結論として「この段階の先島諸島を包括とする物流網の形成は、中継島を結ぶリレー式のモノの移動であったにせよ貝塚時代の文物の移動伝播とは異なり、中国を核とする東アジア貿易圏の北辺に組み込まれたヤマト列島の海洋国家に連結する南方ルート²の動きであり、基本的に中国南部を発着地とする宋船の傍流的な南島往来ラインに乗った、按司層のネットワークによる流通と推定される（吉岡二〇〇二）³としてまとめている。城久遺跡群発掘以前の評価であり、カムイヤキ窯跡に収斂された話であるが交易のシステムの変質に着眼し、その背景に南九州勢力、宋船、在地支配者層の存在を想定している。

(2) 第V期 b（二〇〇〇年はじめから現在）

一九九九年から現在まで木下尚子らは先史時代における琉球の特質を生業と交易に重点を置いて研

究を続けている。これらの一連の研究は『先史琉球の生業と交易1・2』として報告書が刊行されている（木下（編）二〇〇二・二〇〇三・二〇〇六）。この中で総括として「生業を中心としてみた琉球列島の六〜八世紀は、奄美ではヤコウガイを通して何らかの対外交易を行っていたが、日常生活では先史時代以来の採集経済段階が依然継続し、十世紀以降の国家形成に向かう変化にはなお遠い段階にあった（木下二〇〇六）」とし、生業と交易を主に時代的変遷を示した。

城久遺跡群の発見は、グスク時代移行期を考える上で重要な問題を内包するものである。これまでに刊行された報告書は三冊（喜界町教育委員会二〇〇六・二〇〇八・二〇〇九）でその全容は発掘調査が継続中の現段階において評価の定まらないところもあるが、今後明らかにされるべき課題として池田榮史は三つの課題をあげている。

「第1に奄美大島北部で確認されたヤコウガイ大量出土遺跡と、鈴木が問題提起した南島人による貢納制および階層化社会との関係（池田二〇〇七）」

「第2には、十一世紀代に起こる琉球列島への中国産白磁、滑石製石鍋、カムイヤキ製品の大量流入の背景である（池田二〇〇七）」

「第3には琉球王国成立までの過程に関わる問題である。（中略）日本との境界領域がトカラ列島の臥蛇嶋辺りへと北上していた。このことは第2の問題とも関わるが、鎌倉時代に掌握され、安定していたと考えられる奄美諸島を中心とした日本側の交易システムが崩壊し、琉球国による新たな交易シ

ステムが琉球列島を被いはじめたことを示している。(中略)日本における国内的動乱が日本と琉球列島との交易システムを弛緩させ、これに変わる新たな交易システム構築の動きを生じさせたことが考えられる(池田二〇〇七)」

このような課題点について二〇〇七年に『東アジアの古代文化』130号において特集号が生まれ、古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島として歴史学、考古学研究者による複数の論文が掲載されている。ほぼ同様の内容でこれを発展させたのが『古代中世の境界領域―キガイガシマの世界―』で、翌二〇〇八年の刊行である。また谷川健一を編者とする『日琉交易の黎明―ヤマトからの衝撃―』も著者を重複しながらも、若干の新視点を加え二〇〇八年にまとめられた一冊である。池田編の前二冊が歴史学・考古学を中心としているのに対し、谷川編著の後者には歴史学・考古学分野に加えて民俗学・文学の研究を加えて様々な検討が行われている。上記に掲載された論文から特に、移行期の研究に関わる考古学研究を紹介していく。

池田指摘の第1の課題点について、先ず高梨修は『南島』の歴史的段階―兼久式土器出土遺跡の再検討―と題して、兼久式土器出土遺跡を類型化する。I類⇨兼久式土器のみが出土する遺跡、II類⇨兼久式土器とに若干の土師器・須恵器が伴う遺跡、III類⇨兼久式土器がほとんど出土せず土師器・須恵器が出土する遺跡に分類し「社会集団における鉄器所有形態の相違こそ、階層社会の形成を積極的に支持する考古学的証左になると考えられる(高梨二〇〇七)」として池田指摘の第1の課題につ

いて考古学の立場から論究している。更に、「琉球弧における拠点の遺跡の形成過程は、七世紀前半から奄美大島に小湊フワガネク遺跡群等のヤコウガイ大量出土遺跡が形成されはじめ、八世紀代には喜界島に城久遺跡群が出現、さらに十一世紀代には徳之島にカムイヤキ古窯群が出現するという大筋が描ける。大多数の遺跡は漁労採集経済段階に置かれていて、対外交流の窓口となる少数の拠点遺跡を中心に階層社会が形成されていたと考えられるのである。そうした社会構造において、七～八世紀段階には奄美大島や徳之島から中央政府へ使者が派遣され、南方物産を貢納したのではないかと思われる。奄美諸島北半における拠点の遺跡の形成は、カムイヤキ古窯跡群の出現で類須恵器段階に沖縄諸島・先島諸島へ波及、沖縄本島に新たななる政治的勢力の形成をもたらすものである（高梨二〇〇七）」として古代から中世にいたる琉球弧、特に奄美諸島の歴史的役割を通史している。

池田指摘の第2の課題については、赤司善彦が「高麗時代の陶磁器と九州および南島」において「カムイヤキの生産主体は、日本・高麗・宋の東アジア交易形成の中で、伸張してきた奄美地域の有力な勢力と考えられる（赤司二〇〇七）」として奄美勢力の存在を基層にしながらも東アジアの交易圏形成を契機とするものとする。一方の新里亮人は「カムイヤキとカムイヤキ古窯群」において、「カムイヤキは器の種類が日本本土の中世須恵器と類似し、技術系譜は朝鮮半島に求められ、中国産陶磁器を模した碗が存在するなど、東アジアにおける食器文化を複合的に取り入れた「南島の中世須恵器」である。琉球列島における遺跡からは九州産の滑石製石鍋、中国産陶磁器とともに発見される例が多

く、九州を介した経済関係によって流通していたと考えられる（新里亮二〇〇七）」として九州との経済関係、特に博多との関係を重要視している。加えて、新里亮人は「琉球列島出土の滑石製石鍋とその意義」の中で、「博多を中心とした経済関係が次第に中国へと傾斜していった可能性がある（新里亮二〇〇八）」とし時間軸の中で博多から中国への経済関係の傾斜を指摘している。同様の論調は、鈴木康之の「滑石製石鍋の流通と琉球列島―石鍋の運ばれた道をたどって―」にも見ることができ。 「琉球列島での石鍋の出土は、石鍋の主要な消費者である博多を拠点とする商人たちの活動領域が琉球列島におよんでいたことを示す物証の一つであると考えられるのである。石鍋が出現する時期の琉球列島は、貝塚時代からグスク時代への移行期ととらえられてきた。九州から石鍋がもたらされるとともに、中国産の白磁や銭貨も流入している。一方、琉球列島からはヤコウガイ・硫黄・赤木などの特産物が九州を経由して畿内方面にもたらされ（中略）奄美諸島が交流拠点として果たした独自の役割が注目されるようになる」とともに、貝塚時代からグスク時代への移行過程の検討が深められている。いずれにせよ、石鍋が出現する十一世紀代の琉球列島は、東アジア世界におよぶ文化・技術交流の渦のなかにあつたことはまちがいない、その渦のなかには、博多を拠点に日宋貿易を展開した宋商人の活動も含まれていたと考えられるのである（鈴木二〇〇八）」

池田指摘の第3の問題に関しては、中島恒次郎による「大宰府と南島社会」があげられる。「喜界島城久遺跡群の造営主導者は、奈良後期から断続的ではあれ、ここを訪れ生活を営んでいた。その生

活の内実は、生業を伴うものではなく、休息的な意味が強いと考えられる。断続的な渡航ならびに造営主導者が「国家」事業履行者の色彩が強い人々と言えば、遣唐使が最も蓋然性が高いことになる。(中略) この断続的な行為が一変し、継続的な往来になったのが平安後期、十一世紀後葉～十二世紀前葉の時期であった。城久遺跡群の盛期であり、貿易陶磁器の質こそ九州本土に一般的なものであるが、その量は上層階層の居宅跡に近似した量を示している。加えて流通品ではなく、携行品の性格を付与することができる本土産土器が付帯している点は、渡航者の出港地を想起させる史料としての意味を持ち得ている。一方で、港湾遺跡に見られる多種かつ多量の貿易陶磁器、ならびに国産の広域流通品の出土が見られない点は、ここ喜界島が荷卸場でなかったことを意味している。その後、十三世紀代、大宰府E期以降急速に衰退するのは、城久遺跡群の経営主体者の変化、社会統合の進展の結果として居住地移転など、さまざまな要因が想定でき、ひとつに絞り込むことはできないものの、大型グスク形成期と重なることは興味深く、社会統合の結果と解した可能性が高い(中島二〇〇八)」と論じている。

高梨修は「城久遺跡群とキカイガシマ」の中で、城久遺跡群を形成した社会集団について「現段階では特定するに至らないが、東アジア諸国動乱の時代を背景として日本列島にとどまらない範囲で、大規模の人的交流が存在していたと考えなければならぬ」として日本列島にとどまらない広い地域を想定する。その理由を「城久遺跡群には、東シナ海周辺諸国の事情によく通じた人びとが往来して

いた様子が窺われるのである」と説明した上で、「その背景にはヤコウガイをはじめとする南方物産交易（威信財交易）の巨大経済的権益がある」としてヤコウガイ交易のため「最北の亜熱帯地域（＝国家境界領域）に営まれた拠点施設が城久遺跡群である」と総括する。その上で「琉球弧を舞台とした南方物産交易は、城久遺跡群の出現を契機としておそらく激変したにちがいない。（中略）従前の琉球弧の考古学研究におけるいわゆる貝塚時代後期の停滞的社会的理解では説明ができない（高梨二〇〇八）」として、これまでの研究史を批判し克服を論じている。

中山清美は「境界域の奄美」の中で、「赤木名城は、喜界島とはまた様相の違う大和の中世山城の影響を受けた按司層たちの政治的拠点の場として構築され、その過程を示す遺跡としての可能性が高まってきたと言える。奄美大島、喜界島、徳之島におけるこれらの注目される中世遺跡は、グスク成立前夜から琉球や日本古代国家とのかかわりが深く、東アジア世界を含めた交流史の中で、その位置付けが注目される（中山二〇〇八）」としている。鈴木、中島、高梨、中山に示されるように新たな動向を示す遺跡の評価は、南西諸島における拠点的遺跡として、また日本を含む東アジアの広範な地域の影響を受け登場したと想定する点で共通する。

以上、池田指摘の課題点に関する各研究者における回答だが、総じて奄美における新発見を受けたこともあって、奄美以北を主にフィールドとする研究者による論考が多い。そのため沖縄側の研究との整合性については、残念ながらあまり論及されていない。そこで、次に沖縄側の代表的な研究を『日

琉交易の黎明』所収の論文から紹介する。

先ず盛本勲は「グスク時代の幕開け」において以下のように通史した。「貝塚時代という約四五〇〇～五五〇〇年間の長きにおよんだ琉球列島の採集経済社会も、十一～十二世紀頃によく終焉を迎えた。新しい経済社会すなわち生産経済社会としてのグスク時代の到来である。グスク時代の開始時期や指標、時代概念等については、研究者間で多少のニュアンスの差異が見られるが、筆者は開始期を十一世紀後半～十二世紀前半、時代概念は在地領主（按司）の輩出と領主による地域支配や領民保護のために築いた政治・軍事施設としての記念物であるグスクが築かれた時代、と捉えている」としてグスク時代を評価した上で、歴史的文化的特徴を六点（①奄美から先島諸島の共通の文化圏の成立。②遺跡立地の砂丘地→農耕適地への移動。③穀類中心の農耕の展開と発展。④農耕の発達に伴う土地確保をめぐる争奪の結果としての按司出現。⑤鉄製農具の使用。⑥カムイヤキの操業と海外貿易の開始）の要点にまとめる（盛本二〇〇八）。そしてこれらの文化動態を含めた時期的変遷を眞嗣一（一九七七）、小野正敏（一九九七）の研究を引用し通史した。

宮古の先史時代からグスク時代への移行期については、下地和宏が「陶磁交易と宮古」の中で「大和商人は中国に輸出する夜光貝と硫黄を求めて南へ進出してきたことが予想される。彼らは北九州を中心に活動する商人集団で、（中略）彼ら商人が先史時代の沖繩・先島に未知の文化をもたらすことになる。グスク時代の夜明けとなった（下地二〇〇八）」として北九州を中心に活動する商人の動き

を契機とすると想定している。

八重山諸島については、大濱永巨が「八重山諸島の交易」において、無土器時代における開元通宝等の出土を「漂着物より外来文物を採集し、珍品・装飾品として居住地に持ち込んだものと思われる（大濱二〇〇八）」として文化的変容をもたらさなかった偶発的なものとして評価している。大濱は沖繩のグスク時代に相当する時代をスク時代として時代設定するが、そのスク時代も前期（十一〜十四世紀）と後期（十四世紀中葉〜十六世紀）に分けている。そして前期は北から南進した大和文化集団を担い手として捉え、「これまでの狩猟・漁労の食料採集社会から、牧畜や粟・麦・米など農耕を営む生産社会へと大きく移行した可能性が高い。（中略）九州海商らは南島産物の調達や確保のために、南島の島々との間を頻繁に往来したと考えられる（大濱二〇〇八）」とした。一方の後期は「明国の海禁政策が始まって、中国福建省沿岸海商らが宮古や八重山の島々に産出する交易物産を求めて海禁策を犯しても、密貿易・私貿易という形で宮古や八重山の島々に来島してきたのである。（大濱二〇〇八）」として時代を前後して外来文化の媒介者の相違を想定している。

最後に、このほかにも島の先史学の視点から沖繩諸島を中心とする先史・原始時代の歴史の変遷を高宮広土は世界史的視点で素描している。特に、貝塚時代後期については、遺跡数の減少を指摘し、フードストレスのあった社会を想定、先住民のクラッシュという仮説を提示。グスク時代社会への展開についても、集約的農耕社会の展開を、島における「バンド社会から王国への変遷」のあった島と

して世界的にも希有な事例としてその探求の重要性を説いている（高宮広二〇〇五）。

六 小 結

以上、研究史を概観してみた。貝塚時代後期の終焉とグスク時代のはじまりをめぐる議論について、多くの考古資料が用いられ、さまざまな解釈が提示されていることがわかる。大枠では①「交易社会」、②「農耕社会」、③「グスク形成」、④「琉球王国の誕生」、⑤「階級社会の誕生とその内容」の五つの文化史の開始期やそのプロセスに関して、考古資料の様々な解釈が用意されていることがわかる。また、論点や争点となっている考古資料の解釈の相違もしばしばみられる。これらの考古学的に提示された歴史観は、歴史学など隣接分野に援用されることもあるため、考古学研究者は単に批判的なやりとりを行うだけでなく、考古学的な事実とその解釈をめぐる理論の相違、さらにはそこから用意された解釈の争点を正しく解説することも肝要と考えている。新資料発見によって考古学研究によって用意される新たな歴史観は、もちろん歓迎されるべきであるが、一方で問題点となる留意点などの説明も忘れてはならない。筆者のような後学の徒にとつては単に煩雑なるばかりで、おそらく隣接分野の研究者の方にも混乱を招いているのではないかと危惧する。

近年提示される、あるいは新発見遺跡がもたらした課題・テーマとして提示される、社会構造の問

題、地域差の問題、文化人類学的知見や世界史的視点からみたモデルの提示、歴史学側の既知の歴史観との整合や不整合についても考古学側からは恣意的にならずに考古学的手法と手続きによって議論されることが肝要である。

研究史から概括すると、少なくとも貝塚時代後期の終焉に外来文化の影響があることは確実視していると考えられる。しかしこの外来文化が即、グスク時代のはじまりとなるのかについてはやや混沌としている。そもそもそこにはグスク時代の定義あるいは、地域の議論が必要であることを教えている。更に、グスク社会の形成が単純、単系統の外からの影響や波及ではないということもこれまでの学説が示していると思われる。

そこで求められているのは、研究史でもしばしば議論になる影響の起点や媒介者の出発点の集団がどこに求められるのか、どのようなプロセスで「経済活動が狩猟採集の段階から農耕開始へと移り変わり」「道具が変化して」「物流システムが変質したのか」ということがテーマとして与えられている。言うまでもなく、グスク誕生までのプロセスもこれまでの研究で示されるように島々によって異なることは明らかである。

それぞれの土器・陶磁器などの編年観と文化画期としての出土遺物の構成の画期などを勘案するとおおよそ次表(表2)のような概念で考古学的な出土遺物や遺構があり、これに基づいて解釈として多くの研究者によって文化様相が論及されるとまとめておきたい。

表2 貝塚時代からグスク時代の文化史的変遷の代表的所見と事例

		貝塚時代後期前半 B. C. 3～A. D. 6c頃	貝塚時代後期後半 A. D. 7c頃～A. D. 11c中	グスク時代 (初期) A. D. 11c後～A. D. 13c中	グスク時代 A. D. 13c後～A. D. 17初
集落	住居	竪穴住居 (安座間原・7aジ+ホウ)、掘立柱建物 (7aジ+原西・平敷屋トウバ)	現在不明。奄美は掘立柱建物 (7aジ+初遺跡)	吹出原型 (後兼久原、ガジ+ホウ・北方、他)。喜界島では中心建物有り。奄美では大溝検出例有り。	グスク時代型 (今帰仁ムラほか)、須土層は開城施設を伴い、掘立柱建物 (中心建物有り)
	立地	砂丘立地	砂丘+丘陵+洞穴	台地、沖積地、開地遺跡	丘陵へ偏在
	階層分化	拠点的な集落の存在が指摘される (新里貴2001)	階層分化による奄美地域の優位性が指摘 (高梨2000)	南西諸島の経済圏の成立などが説かれる。威信村の内在化が指摘される (中島2008)	集落内での階層別居住が進行、有力領主が登場する
生産活動	生業	イノーを利用した海産資源の利用	イノーを利用した海産資源の利用。終末期の農耕開始の可能性 (那崎原遺跡)	穀物生産 (新里亮2010)。小規模河川や湧水点を控えた低位段丘による畑跡 (城間・上田2007)	特定の産物を拠点的な地点に集める (黒住2002)。文献・賃納するようになると推定 (古琉球辞令書)
	生産活動	貝輪製作 鉄生産無し。搬入例:板状鉄斧 (宇堅貝塚・清水)	ヤコウガイ製品製作 鉄生産無し。搬入例:不明鉄器 (7aジ+原東)。奄美も複製例有り	カムイヤキ窯の構築などから、専門工人の専業化 鍛冶関連遺物の出土 (後兼久原ほか)	グスク築城などに見る、計画的な土木工事有り 拠点的な遺跡における鍛冶、鋳物師等の登場が推定
葬制	墓所	砂丘埋葬 (木綿原、安座間原)、岩陰墓 (大当原)	砂丘埋葬 (米須、西庭原?)	土壌墓 (木相塚)	岩陰墓 (風葬)、王陵 (玉御殿等)
	搬入	ゴホウラ・イモガイ 金属製品、ガラス玉、(想定:米、布ほか)	ヤコウガイ・ホラガイ。文献:アカギ 鉄器、ガラス玉、開元通宝 (想定:米、豚ほか)	不明。推定ではヤコウガイ等 滑石製石鍋、陶磁器、カムイヤキ	不明。文献:馬、硫黄、磨刀石、螺殻 (明実録) 陶磁器、鉄鍋。文献:朝貢 (明実録)
交易	媒介者	九州西海岸から南西諸島などの海人。後半は奄美人が運搬者になると指摘 (木下2005)	南島路開発。喜界島における大和朝廷出先機関の指摘。唐朝人來島	博多網首、南九州商人。東アジア海域を往来する人。	琉球人、中国人、日本僧侶
	相手	日本	日本、(中国?)	中国、日本	中国、日本、朝鮮、東南アジア
	特徴	遠隔地交易による南海産貝輪交易 (木下1989)	非市場交易ながら、ワカガイ交易 (高梨2000)。文献:南島人の來朝 (鈴木1987)	南西諸島の経済圏の成立。内部流通システムについては不明	私貿易の拡充?、中継貿易、朝貢貿易
人工遺物	器類	尖底器形の土器。口径40cm大型～中小型。器種分化乏しい。食膳具の欠如	平底器形の土器。口径30cm前後均質。器種分化乏しいが、壺若干増量。食膳具の欠如	滑石製石鍋の模倣土器、羽釜形土器、土師器製の模倣など。在外器形の模倣による煮沸具。食膳具は陶磁器	模倣の継続。舶来品による器によって食器を用いるも、列島内で地域差が生じる
	武器 器具	青銅製の銅鏃 (搬入)	鉄製の鏃 (奄美マツノト)、刀鐔 (平敷屋トウバ)	不明	鉄鏃、骨鏃。特に大規模な城郭遺跡で多出。防具類日本的だが、在地化
	装身具	貝製装身具豊富 (ゴホウラ・イモガイ製貝輪、貝製垂飾品、貝小玉)	貝製装身具豊富 (ゴホウラ貝輪、イモガイ製貝輪、貝製垂飾品、貝符)	ガラス製の玉	ガラス玉、勾玉、簪
	銭	五銖銭	開元通宝	宋銭	中国渡来銭 (宋～明銭)
	貝 鏝	シャコガイ等・二枚貝	シャコガイ等・二枚貝	ザルボウ等・二枚貝	タカラガイ
	他	ホラガイ製有孔製品	ヤコウガイ製貝匙		ヤコウガイ製貝匙
自然遺物	家畜	イヌ	イヌ	イヌ・ウシ・ウマ?	イヌ・ウシ・ウマ・ニワトリ
	動物	イノシシ、ジュゴン、ウミガメ	イノシシ、ジュゴン、ウミガメ	イノシシ、ウシ、ウマ	イノシシ、ウシ、ウマ
	植物	堅果類	前半は堅果類。(終末期遅説あり、現在否定的)	コム、コムギ、オオムギ、アワ	コム、コムギ、オオムギ、アワ
	貝類	サンゴ礁域の貝類	サンゴ礁域の貝類	内湾、河口域の貝類	内湾、河口域の貝類

第3章 論点の整理

論点を整理するにあたり、最初に時系列の整理をしておく必要がある。考古学では時間軸の物差しとして遺物や遺構を用い編年を組み立てる。これはあくまでも相対的な時間的位置づけであり、実際の遺跡では少々複雑な状況を示す場合が多い。これらの出土状況の解釈の相違によって編年研究にも様々な枠組みが研究者によって用意されている。加えて、この相対的に理解される遺物・遺構の編年に年代が付与されている。遺物そのものにもライフサイクルがある。年代の付与については様々な手続があることも考古学の学問の一つの特色である。そのような前提があることを付言しておきたい。

当該期の相対年代として一般的に用いられる考古遺物は土器である。土器研究自体、沖縄諸島、奄美諸島、先島諸島でそれぞれの編年体系が組まれている。様々な争点がここにもあるが、本論を進めるにあたり、沖縄諸島において、おおよそ一致していると考えられる編年を基軸に進める。沖縄諸島には以下の①②③の三つの土器群の大きな枠組み分類がある（岸本ほか二〇〇〇、新里貴二〇〇四）。

①「尖底土器群」弥生土器や貝輪及び素材貝のストックなどが伴うことから、弥生時代からおおよそ古墳時代と並行関係にあると理解される。絶対年代については近年の弥生時代の時間的遡及の問題など解決しなければいけない課題も多い。

②「くびれ平底土器群」貝札（小型化し文様は略化した上層タイプ）、開元通宝（初鑄年A.D.621）

や本土産須恵器、銅製鐺等の出土例がある。おおよそ古墳時代のある時期から十世紀頃の年代観を与えられる。

③「グスク土器」グスクやグスク時代の集落遺跡で中国陶磁器と共伴する。中国陶磁器の生産年代や大宰府等における陶磁器編年の時間的位置づけを援用して、おおよそくびれ平底土器群との交代期を十一世紀の終わりごろとして考えられている。なお、各土器群の交代期のあり方については、やや長期的な併存を考える見方（池田二〇〇四）と、短期的に型式が置き換わったと想定する考え（宮城・具志堅二〇〇七）の対極する考えが示されている。

なお、グスクでは明代の陶磁器（瀬戸ほか二〇〇七）が多出するようになり、やがて沖縄諸島では土器製作そのものがある段階で途絶し、陶磁器のみが出土する時代がある。これを含めて概括すると表3のように整理することができる。

一 貝交易とサンゴ礁文化の発達

a 期で発現した文化の特徴は①～③の三点が挙げられる。

①サンゴ礁海域における漁労文化が発達。漁労活動そのものは縄文時代並行期に遡るが、サンゴ礁の発達に伴い多様な海産資源を潮の満ち引きを利用して採集活動を行うとともに、漁網の発達に

表3 本論における時期区分

区分	編年の指標になる遺物
貝塚時代後期	a 期 尖底土器群(阿波連浦下層式/浜屋原式/大当原式)
	b 期 平底土器群(アカジャンガー式/フェンサ下層式)
グスク時代	c 期 グスク土器(1式・2式)+カムイヤキA群+白磁(大宰府分類IV類, V類, VI類, VI-4類, VII類, VIII-2類)
	d 期 グスク土器(3式)+カムイヤキB群+青磁II類・III類, 白磁A群, C1群, C2群, F類
	e 期 青磁IV類・V類, 白磁C3群・D群, 陶器3類
	f 期 青磁VI類, 白磁E群, 青花碗C群・D群, 皿B1群小型・C群, 陶器6類
	g 期 青花碗B2群・I群・J群, 皿F群, 唐津
近世	沖縄産陶器の生産

よって「小型のものを含めて一括捕獲(樋泉二〇〇二)」する利用形態へと変質することが指摘されている。

②当該期の特質として「貝文化(知念二〇〇四)」があげられる。やはりその初期は前代に遡るが、多様な貝素材を用いた装飾品が製作されるようになる。

③海域資源の獲得と獲得後これを退蔵し、自身の消費財としてではなく交換財として日本本州の弥生人などの求めに応じて提供され、その見返りに外来の文物を入手したことが明らかとなっている(木下一九九六)。これによって沖縄諸島を含む琉球列島が南海産貝輪の生産地としてその交易システムに編入され、島々ではその交易システムの中で、徐々に役割分担が生まれたものと考えられる(新里貴二〇〇一)。新里貴之はさらに弥生時代並行期の奄美・沖縄両諸島の拠点集落と交易網の復元を考古資料から行う。またその背景となる社会が複雑化したとし、これを示す事象として墓制の複雑化や外来品の遺跡間における出土の粗密などをあげている。更に論を展開させ、交易システム

の盛衰とシステムの再編が島嶼間の社会構造の浮き沈みとなったと説く（新里貴二〇〇九）。

二 南西諸島北辺の動向と初期貿易陶磁の南漸

b 期段階に、沖縄諸島の土器文化はくびれ平底土器へと変化を遂げる。a 期には奄美―沖縄は比較的隔絶した土器文化圏であったのに対し、b 期は両者の土器文化は近縁性を深める。この段階の貝交易については、大きく二つの仮説が用意されている。一つはヤコウガイ交易を唐朝との間で成立させる考え方（木下二〇〇〇）と、もう一つはヤコウガイ大量出土遺跡における対大和交易である（高梨二〇〇五）。ヤコウガイ以外にも、ホラガイなどの交易品（木下一九九六）もあげられる。しかし両論とも筆頭はやコウガイと推定する。ヤコウガイが大量に出土する遺跡は奄美では兼久式の時期にあたり、盛期は兼久式でも古式の段階に集中する。一方沖縄における盛期は貝塚時代後期前半葉段階の正当式段階に集中する。両地域のヤコウガイ出土遺跡をどのように包括的に理解するのが今後の課題であり、この点の高梨修（二〇〇五）、安里進（二〇〇〇b）の議論にみる評価の相違が顕在化している。文化評価をめぐる双方のやり取りに対して新里貴之は含有されるアイデンティティーの問題、一元的なプロセスでは理解が難しく、複雑なプロセスを想起する。その上で無文字時代にも適用できる理論や資料操作方法、考古学資料という同じ土俵で研究成果をぶつけあうことを提案する（新

里貴二〇〇五)。

さて、当期における前時期に見られない新来の要素として、貝札と開元通宝があげられる。この二つの資料から高梨／木下のヤコウガイ貿易との関係、高梨／安里の歴史評価の問題について、考古資料の研究状況を整理してみたい。

貝札をめぐる議論を考える上で重要な遺跡が、南西諸島の北辺種子島の広田遺跡である。「列島の弥生、古墳時代社会と南島社会の接点における社会・生活のあり方を知るだけでなく、わが国の文化形成の多様性を知るうえで重要(文化庁文化財部二〇〇八)」として国史跡の指定を受けている。弥生時代から古墳時代並行期(a期～b期)の遺跡として知られ特にb期の奄美―沖縄で出土する貝製品を伴う人骨が多出しているため、単に種子島で発見された特異な遺跡として捉えるだけでなく、南西諸島の中で遺跡の相対的位置付けの深化が望まれる。これに対し新里貴之は、大隅諸島が新たな貝交易の仲介窓口として機能し、西日本の首長層の装身具情報を得、その財を貝に転化し膨大な量を消費することで、南西諸島のどの地域とも異なる壮麗な貝製装身具文化を生み出したと評価する(新里貴二〇〇九)。

もう一つの新来の要素の遺物としてあげた、開元通宝については沖縄・奄美諸島ではおおよそくびれ平底土器に伴い、先島諸島では無土器時代の遺跡から出土例が報告されている。発見当初は遣唐使による偶発的な持ち込みが想定された(金関一九六〇)。これに対して、高宮廣衛は島内での流通は物々

交換を主体としながらも、島外の交易などにおいては貨幣が使用されたのではないかと想定する（高宮廣一九九五）。

琉球列島出土の開元通宝の特徴は以下のようにまとめることができる。奄美・沖縄では①先史時代の一般集落遺跡からの出土である。②出土枚数が、本州の同時代遺跡に比べ多い。③本州の同時代遺跡では皇朝銭とともに出土するが、奄美・沖縄では皇朝銭を含まない開元通宝のみの銭種構成である。一方、先島地域での出土は今のところ宮古を除き八重山に限られている。加えて、先島の事例では、④会昌開元（初鑄845年）と呼ばれる、福建省福州鑄造の銭が含まれている。八重山諸島はこの時代の沖縄との交渉は無かったと想定されており、当然本土産の製品との相関関係は今のところみられない。僅かに鉄製品の出土例があるが、鉄器について本州のものか大陸のものか型式学的に決着を付けることは今のところ難しそうである。評価の定まらない資料ながら、長沙窯系の黄釉緑褐彩碗が八重山古墓出土と伝えられており（東京国立博物館一九七八）、これを八重山地域における唐朝との交流の一端を示唆する可能性のある文物としてあげることが出来る。先島諸島と奄美・沖縄諸島の開元通宝は一見同調的な出土状況を見せるが、先島では一括出土枚数は沖縄よりも相対的に多く、会昌開元を伴うなど質的に若干の相違点も指摘することができる。今後は開元通宝の両地域での比較検討が行われ、交渉が一元的なものか多元的なものかの究明が行われることに期待したい。

さて、沖縄・奄美地域の開元通宝以外の招来文物は明らかに日本列島からのものである。土器以外

にも金属製品が数例出土例があり、中でも注目されているのが平敷屋トウバル遺跡（うるま市）から出土した透鐺で、平安時代前期の本土の伝世品に類品があることが確認され古代相当期の遺物であることが最新の研究でも追認されている（久保二〇一〇）。また、近年これまで知られていない不詳の遺物が出土している。例えば宇検村の屋鈍遺跡では日本本州の古代の土器とともに産地不詳の陶器が出土、これがクメール陶器と思わしき資料と指摘されており（西園・井口二〇一〇）、今後の研究の進展によつては交流・交易の内容を把握するヒントになる可能性もあり注目しておきたい。いずれにしても、先史時代遺跡出土の開元通宝等外来の文物の背景に対大和、対大陸を見据えた議論があり、内部動向としての貝札やヤコウガイなどの研究が進められることで、研究者間で提示される考古資料の解釈の深化が期待される。

b期の後半期については、これまで南西諸島では薩南地域までしか越州窯青磁などの出土は見られなかった（亀井一九九三）。しかし近年喜界島城久遺跡群や徳之島川嶺辻遺跡（伊仙町）からも発見され、本州を経由した文物の流入が奄美諸島にも及んでいることが明らかとなった。日本本州招来の遺物は縄文時代より断続的に琉球列島にもたらされているが、この時期がグスク時代直前の時代であることから注目されている。

以上のことから、なんらかの形でa期伝統の交易構造の変質、運搬者・消費者の変化が、重層的に起こったことを窺わせている。a↓b期に沖縄では、遺跡の立地が砂丘地に偏在するa期から、丘陵

地を含む内陸部各所への遺跡の展開が顕著なb期という内部変化が生じている。このような居住地選択の背景にしばしば生業活動の変化があげられるが、沖縄島における農耕の需要について、那崎原遺跡の穀物の検出例（高宮広一九九六）があるものの、現段階では否定的な状況とされる（高宮広二〇〇四）。

三 農耕の開始と琉球文化圏の始期

c期初期に展開する滑石石鍋模倣土器文化の斉一制は、奄美―沖縄―先島を一つの文化圏としたが、これらの土器文化は間もなくそれぞれの島々で在地化していく様子が看取される（宮城・具志堅二〇〇七、新里貴二〇〇四、二〇〇六）。c期になって登場する新来の遺物はこの時代への転換を知る鍵を握っている。特に「カムイヤキ十滑石製石鍋十玉縁白磁碗」の三点セットはその代表的な遺物である。

沖縄島における変化の一端を理解する遺跡として、後兼久原遺跡（北谷町）第V層はその状況をよく伝えている。居住生活のパターンである方形プランの住居十高倉のセット、地床炉、石鍋模倣土器の煮沸具など、生活様式がほぼ揃った形で登場、貝塚時代の伝統は刷新され、新来の要素は食器や住居に留まらず、墓制が変質し、農耕や牧畜（家畜）などが加わっている。その文化流入の手がかりと

して、喜界島の城久遺跡群が近年注目を集めている。検出される遺構等主体はc期にあるとされ(澄田・野崎二〇〇八)、論者によって様々な評価がなされている。代表的な所見として①「b期について不定期的な痕跡(中島二〇〇八)」②「東アジア地域を見据えた人の動き(赤司二〇〇八、高梨二〇〇八)」③「在地勢力の拠点的な遺跡(伊藤二〇〇九)」があげられる。

①～③は、遺跡を残した人々の位置づけを、外来者とみる①と、在地とみる③とで解釈に相違があり、またやや混合的な表現となる②など、その割合と質によって若干の温度差がみられる。当該遺跡の位置づけの論議は、陶磁器や土器といった食器類以外にも石器等の遺物や複数建物跡や墓等の遺構の検出例があるので、多角的に検討され、その位置づけに迫ることが期待される。いずれにしても、c期(一部遡りb期を含む)には、少なくとも北の文化の南漸があり、琉球列島内における勢力の勃興も見逃すことができないことは間違いないだろう。

またc期に操窯をはじめ徳之島のカムイヤキ窯も新たな動向を示す遺跡の一つである。カムイヤキ窯跡については、島外からもたらされた新来の文化の影響によって開窯されたことは一致しているが、操窯の契機と社会背景や工人の技術系譜に関して幾つかの争点がある。①奄美における在地支配層の成長。②窯構造や生産品の構成の近似から日本や大陸(朝鮮半島)の影響を指摘、日本では窯構造等が近似する肥後が具体的な地名としてあがっている。また、地理的な関係等から南九州など影響力を重視するなど複数の地域が候補にあがり、上記地域の重層的あり方とする考え方。また、③主宰

者あるいは指導者の主体論にも在り(奄美諸島や沖繩諸島)とみるか、大陸(宋商人)、日本(博多商人南九州の勢力等)とみるかなどの研究者間の見解の相違がみられる(新里亮二〇〇四)。

c期の沖繩の集落遺跡においては、これまでにあつた貝札などの貝製の装身具が消失するなど、文化変容が大きいことから、たびたび移住者(渡来人的集団)の入植が想定されてきた(安里一九七八)。人類学的見地からもb/c期には大きな画期が認められるとされ、c期出土人骨はおおよそ中世日本人の形質的变化と同調的であるとされている。また、抜歯習俗は現在のところc期の出土人骨からは確認されておらず、ここでも断絶が知られる(土肥二〇〇三)。

しかし一方で、漁労文化や食膳具の欠乏など貝塚時代後期文化伝統も認められる。特にサンゴ礁利用のパターンは、漁具である貝錘がタカラガイへと変化(島袋二〇〇三)する形態的变化こそ認められるものの、総じて沖繩の基層的文化として次代にも引き継がれていたものと考えられる。時代は下るが、e/g期にあたる集落遺跡である今帰仁ムラ跡ではサンゴ礁域の貝を自給的に採集・消費していることが指摘されており(黒住二〇〇五)、貝組成だけ見ればa/b期の伝統的生業を保持している。また鉄器が普及したと考えられるc期以降の遺跡でも、しばしば石器が出土することから、a/b期伝統として考えられる。

四 沖縄諸島におけるグスクの築城

d期には沖縄島には、グスクの中核的な部分に大型の建物が建築され、柵に囲まれた砦景観が現出する。これらはやがて石垣をもった大規模な城郭へと整備されていく。今帰仁グスクの主郭における展開（金武一九八七）はこの事例の最も典型的なものだと考えてよいだろう。

沖縄の時代区分ではグスク時代は、グスクの出現をもって区分される（高宮廣一九六五）。その特徴として①本格的な農耕や家畜飼育する社会への移行。②金属器の使用とその普及。③中国を主とした対外貿易の活発化。④先島諸島との文化的統一が指摘されている（嵩元・安里一九九三）。

しかし、グスクⅡ砦・城の出現は必ずしもこれらの①～④の文化と期を同じくして登場したのではない。少なくとも砦的機能を持ったグスク出現は農耕や家畜、金属器の使用や先島諸島との文化的統一に後続する様相にあり、中国を主とする対外貿易の活発化と同調的であったと考えられる。金属器の使用と普及については一部b期に遡る可能性も否定できないが遺跡間には出土の多寡がみられる。農耕と先島諸島との文化的統一は基本的にc期初期に果たされた新来の要素と考えられる。

貝塚時代（a b期）においても、交易社会への編入が先んじてあることは明らかである。もちろん、沖縄における農耕社会の到来による新たな内部動向も見逃すことはできない。交易と農耕という少なくとも二つの要素が各地に多様な社会をつくり、グスク（及び先島などのグスク相当の遺跡）が構築

されるに至ったのだろう。

ここで注目したいのは、b～c期においては奄美地域に偏りのあつた日本本州からの搬入文物やカミヤキなどの消費財の分布は、c～d期に変質していることがあげられる。日本本州を經由して搬入された中国陶磁器の組成がやがて日本本州と同調的ではなくなる。その遺物の一つが沖繩諸島へ先島諸島において出土する福建省連江県浦口窯及び閩清義窯生産の粗製磁器である（宮城・新里二〇〇九）。粗製の陶磁器とカミヤキが時期を同じくしてc/d期には奄美地域から沖繩・先島地域へ偏る様子が看取される（新里亮二〇〇四）。

五 琉球列島における国家の形成

国家体裁の考古資料的要素として日本本州の古墳時代を初期国家と捉えた都出比呂志（二〇〇五）は、①～④の要素を挙げる。①階級身分の形成。②租税・用役。③官僚制・軍事制。④物資流通の広域化。沖繩における①～④の状況はグスクの築城前後に認めることが可能と考える。考古遺跡である城郭的グスクの出現は支配身分の登場と、被支配層の分化の顕在化として①を指示。グスク造営における労働力徴集と、グスク主体部の消費状況の特異性は②の可能性を示唆。③については秩序化としての城郭内の再配置がグスクに実施されることから推察される（宮城二〇〇六）。また、出土武具の「鏃」

を集成した上原静の研究によれば、その出土量のピークは十四世紀後半～十五世紀にあるとされる（上原・宮城二〇〇七）。④の物資流通はグスク出土陶磁器が端的に語っている。

沖繩諸島ではd期を始点に国家的体裁を整えつつあり、e期に至り政体の登場が想定される。e～f期には武器のピークと、権力の集中を目的とする争乱の時代にあたり、fg期において遂行された今帰仁城跡内の郭内の機能転換（玉城二〇〇九）や、首里琉球国中山王によって実施されたとされる首里集居は、在地領主を巨的な立場へと編入することで序列化を図ったと考えられ、察するに一部の拠点的グスクを除きf～g期には廃城となっていることもこれを指示していると考えられる。

歴史学の上里隆史は近年著した著書の中で、琉球王国誕生の契機を海域ネットワークの拠点「港市那覇」の形成と重複させ、以下のように素描する。各島嶼と「シマ（集落）」を単位とした琉球列島社会のなかで、奄美地域の相対的な地位の低下を決定づけ、沖繩島を中核とする国家形成をうながした契機が、十四世紀中頃における日中間航路「南島路」の活況と、それにとまなう港湾都市・那覇の形成であった（上里二〇一〇）。

近年、那覇港に接する渡地村跡（那覇市）の発掘調査が行われた（沖繩県立埋蔵文化財センター二〇〇七）。多出した遺物の推定時期は上里指摘の十四世紀よりもやや下るが、膨大な陶磁器が出土し、那覇の活況を考古学的に証明する貴重な遺跡の発掘が行われている。また、集落遺跡だけでなく、近年海域から採集される陶磁器も発見されており、沈没船等の海事考古学研究（宮城ほか二〇一〇）や、

陶磁器をはじめとする生産地の調査（木下ほか二〇〇九）も着手されている。筆者もこれらの調査の一部に参加させていただいたが、交易の構造把握のためには、生産地（窯跡等）―流通（沈没船等）―消費地（集散地遺跡・拠点遺跡・集落遺跡等）の検討が行われることで、はじめて実証的に交易の実態の把握が可能と考えられる。資料数は限られるが、今後通史的、空間的、構造的に社会史の考察が深められることで、琉球列島の考古学研究の深化があるものと考えている。

第4章 おわりに

以上、概観した内容は沖縄諸島を中心としたグスク時代開始期前後の考古学研究史の問題点や課題点を概説したものである。しかしこの時代の狭間には、先史時代研究が考古学研究の主力で、文献が比較的豊富になる歴史時代では歴史学が主体となって研究されるという、資料の性格上の問題も横たわっている。その中で、考古学の編年と時代区分を進展させ、安易な実年代付与や、文献の補助的な軽率な社会評価に寄らない考古学研究としての、年代の検証や文化理解のための理論の構築が進められることが重要である。

その基礎的な検証に加えて、個別地域史からの脱却もまた大きな課題の一つである。文化の多様性を鑑みれば、地域から積み上げることは極めて重要であるが、一方で南西諸島全体の中で俯瞰し、各

遺跡の評価や検討が行われることも忘れてはならない。先史時代からグスク時代、あるいは更に続く時代への歴史展開を説明することが肝要である。その点では、琉球列島という地域的枠組みや日本列島という地域的な枠組みの視点だけでなく、更に東アジア全体の歴史的展開と比較研究なども課題点としてあげておきたい。例えば東アジア史において「琉球列島の先史時代からグスク時代への歴史展開」が、いかなる位置づけが可能かといった、新たな視点が今後は必要だろう。

今回は琉球列島を射程に入れながらも、研究史の多寡からどうしても沖縄諸島に偏ったことは否めない。奄美はある程度紹介することができたものの、特に先島の問題についてはほとんど触れることができなかった。宮古や八重山地域における無土器時代／グスク時代（スク時代）の画期についての研究はやや低調ながら、南西諸島全体の中で考える必要がある。

最後に、本論は自身の研究の整理過程で、考古学研究が現今取り組んでいる課題や、争点の理解が深めればと思ひ執筆したものである。この点では筆者の研究私見を述べたものではない。それでも、やや混沌とし毎年新たな発見と新知見が提示される考古学研究において、次へのステップの足がかりになれば幸いである。

なお本論は沖縄国際大学大学院修士課程において二〇〇八年度に提出した修士論文の研究史の一部を第2章に、第3章に二〇一〇年に『考古学ジャーナル』において執筆した筆者小論を再構成したものである。特に前者執筆にあたっては、江上幹幸先生、上原静先生に大変お世話になった。加えて、

本論の掲載については、沖縄文化研究所所長の屋嘉宗彦先生に執筆を勧められ、自身の未発表論文を再構成し発表するきっかけを与えて頂いた。末文となりましたが感謝申し上げます。

《参考文献》

赤司善彦 「高麗時代の陶磁器と九州および南島」『東アジアの古代文化―特集古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島―』二〇〇七年

安里進 「沖縄における原始共同体の解体過程（試論）―沖縄本島南部・久米島を中心として―」『沖縄歴史研究』第11号 沖縄歴史研究会 一九七四年

安里進 「グシク文化の成立と外来文化」『青い海』72号 青い海出版社 一九七八年

安里進 「考古学におけるグシク論争の整理と問題点―階級社会形成過程論争への止揚―」『新沖縄文学』42号 沖縄タイムス社 一九七九年

安里進 「琉球―沖縄考古学的時代区分をめぐる諸問題（上）」『考古学研究』34―3 考古学研究会 一九八七年

安里進 「琉球―沖縄考古学的時代区分をめぐる諸問題（下）」『考古学研究』34―4 考古学研究会 一九八八年

安里進 「沖縄学―交易を軸に発展したサンゴ礁の島々」『アエラムック 古代史がわかる。』朝日新聞社 二〇〇二年^a

安里進 「交易社会への道―弥生時代の沖縄諸島―」『月刊文化財』文化庁文化財部監修 二〇〇二年^b

- 安里進 「琉球王国の形成と東アジア」『琉球・沖縄史の世界』日本の時代史18 吉川弘文館 二〇〇三年
- 安里進・土肥直美 『沖縄人はどこから来たか―琉球Ⅱ沖縄人の起源と成立―』ボーダインク 一九九九年
- 安里進・山里純一 「古代史の舞台 琉球」『列島の古代史 ひと・もの・こと』1 岩波書店 二〇〇六年
- 池田榮史 「グスク時代開始期の土器編をめぐって」『考古学研究集録』第5号 琉球大学法文学部考古学研究室 二〇〇四年
- 池田榮史 「古代・中世の日本と琉球列島」『東アジアの古代文化―特集古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島―』130号 二〇〇七年
- 伊藤慎二 「10〜13世紀前後の琉球列島」『考古学ジャーナル』591 ニューサイエンス社 二〇〇九年
- 上里隆史 「琉球の大交易時代」『日本の対外関係4倭寇と「日本国王」』吉川弘文館 二〇一〇年
- 上原静・宮城綾乃 「南島考古資料(2) グスク時代出土の鉄鏃と骨鏃」『廣友会誌』第3号廣友会 二〇〇七年
- 大濱永亘 「八重山諸島の交易」『日琉交易の黎明―ヤマトからの衝撃―』(叢書・文化学の越境⑰) 森話社 二〇〇八年
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 『渡地村跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第46集 二〇〇七年
- 沖縄考古学会(編) 『石器時代の沖縄』新星図書 一九七八年
- 小野正敏 「村が語る八重山の中世遺跡・信仰・伝承」『大航海』No.14 (特集考古学的中世) 新書館 一九九七年

年

小野正敏 「密林に隠された中世八重山の村」 『歴博フォーラム再発見・「八重山の村」の記録村が語る沖縄の歴史』 新人物往来社 一九九九年

金関丈夫 「琉球野国貝塚発見の開元通宝について」 『九州考古学』 9号 一九六〇年

喜界町教育委員会 『城久遺跡群・山田中西遺跡Ⅰ』 喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書 8 二〇〇六年

喜界町教育委員会 『城久遺跡群・山田中西遺跡Ⅱ』 喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書 9 二〇〇八年

喜界町教育委員会 『城久遺跡群・山田半田遺跡』 喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書 10 二〇〇九年

岸本義彦・ほか 「沖縄編後期の土器様相について」 『琉球・東アジアの人と文化―高宮廣衛先生古稀記念論集―』

(上巻) 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会 二〇〇〇年

木下尚子 『南島貝文化の研究―貝の道の考古学―』 法政大学出版局 一九九六年

木下尚子 「開元通宝と夜光貝―7〜9世紀の琉・中交易試論―」 『高宮廣衛先生古稀記念論集 琉球・東アジアの人と文化(上巻)』 二〇〇〇年

アの人と文化(上巻) 二〇〇〇年

木下尚子(編) 『先史琉球の生業と交易―奄美・沖縄の発掘調査から―』 熊本大学文学部 二〇〇二年

木下尚子(編) 『先史琉球の生業と交易―奄美・沖縄の発掘調査から―改訂版』 熊本大学文学部 二〇〇三年

木下尚子(編) 『先史琉球の生業と交易2―奄美・沖縄の発掘調査から―』 熊本大学文学部 二〇〇六年

木下尚子(編) 『十三〜十四世紀の琉球と福建』 熊本大学文学部 二〇〇九年

- 金武正紀 「沖繩のグスク」『考古学ジャーナル』No. 284 ニューサイエンス社 一九八七年
- 久保智康 「琉球の金工」『日本の美術』No. 533 (株)ぎょうせい 二〇一〇年
- 黒住耐二 「貝類遺体からみた奄美・沖繩の自然環境と生活」『先史琉球の生業と交易―奄美・沖繩の発掘調査から』熊本大学文学部 二〇〇二年
- 下地和宏 「陶磁器交易と宮古」『日琉交易の黎明―ヤマトからの衝撃―』(叢書・文化学の越境⑦) 森話社 二〇〇八年
- 城間肇・上田圭一 「いわゆる植栽痕についての一考察―沖繩県内における田畑関連遺跡の集成に向けて―」『南島考古』第26号 二〇〇七年
- 新里亮人 「カムイヤキ古窯の技術系譜と成立背景」『グスク文化を考える』新人物往来社 二〇〇四年
- 新里亮人 「カムイヤキとカムイヤキ古窯群」『東アジアの古代文化―特集古代・中世の日本と奄美・沖繩諸島―』130号 二〇〇七年
- 新里亮人 「琉球列島出土の滑石製石鍋とその意義」『日琉交易の黎明―ヤマトからの衝撃―』(叢書・文化学の越境⑦) 森話社 二〇〇八年
- 新里亮人 「琉球列島穀物生産小考」『先史学・考古学論究』5 (甲元眞之先生退任記念) 龍田考古会 二〇一〇年
- 新里貴之 「南西諸島における弥生並行期の土器」『人類史研究』第11号 一九九九年

- 新里貴之 「物流ネットワークの側面―南西諸島の弥生系遺物を素材として―」『南島考古』第20号 沖繩考古学会 二〇〇一年
- 新里貴之 「沖繩諸島の土器」『考古資料大観』12 小学館 二〇〇四年
- 新里貴之 「奄美諸島地域における考古学覚書―近年の弥生時代〜中世初頭の研究を中心として―」『奄美ニユ―ズレター』18 鹿児島大学 二〇〇五年
- 新里貴之 「奄美諸島のグスク系土器」『Archaeology From the South』二〇〇六年
- 新里貴之 「貝塚時代後期文化と弥生文化」『弥生時代の考古学Ⅰ 弥生文化の輪郭』同成社 二〇〇九年
- 鈴木靖民 「南島人の来朝をめぐる基礎的考察」『田村圓澄先生古稀記念 東アジアと日本（歴史編）』吉川弘文館 一九八八年
- 鈴木康之 「滑石製石鍋の流通と琉球列島―石鍋の運ばれた道をたどって―」『古代中世の境界領域―キカイガシマの世界』高志書院 二〇〇八年
- シマの世界』高志書院 二〇〇八年
- 澄田直敏・野崎拓司 「喜界島城久遺跡群」『古代中世の境界領域 キカイガシマの世界―キカイガシマの世界』高志書院 二〇〇八年
- 瀬戸哲也・ほか 「沖繩における貿易陶磁研究―14―16世紀を中心に―」『中世窯業の諸相―生産技術の展開と編―』補遺編 二〇〇七年
- 高梨修 「奄美におけるグスク研究のパスpekティブ」『南日本文化』第30号 鹿児島短期大学付属南日本文

化研究所 一九九七年

高梨修 「ヤコウガイ交易の考古学―奈良―平安時代並行期の奄美諸島・沖縄諸島における島嶼社会―」シリ

ーズ現代の考古学五『交流の考古学』朝倉書店 二〇〇〇年（再録：『ヤコウガイの考古学』同成社）

高梨修 『ヤコウガイの考古学』ものが語る歴史10 同成社 二〇〇五年

高梨修 「南島」の歴史的段階―兼久式土器出土遺跡の再検討―『東アジアの古代文化―特集古代・中世の

日本と奄美・沖縄諸島―』130号 二〇〇七年

高梨修 「城久遺跡群とキカイガシマ」『日琉交易の黎明―ヤマトからの衝撃―』（叢書・文化学の越境⑩）森話

社 二〇〇八年

高宮廣衛 「沖縄（古墳文化の地域的概観）」『日本の考古学』IV（上）河出書房新社 一九六五年

高宮廣衛 「沖縄諸島における新石器時代の編（試案）」『南島考古』第6号 沖縄考古学会 一九七八年

高宮廣衛 「開元通寶からみた先史時代終末の沖縄」『王朝の考古学―大川清博士古稀記念論集―』雄山閣

一九九五年

高宮廣衛 「開元通宝と按司の出現（予察）」『南島文化』第19号 沖縄国際大学南島文化研究所 一九九七年

高宮廣衛 「城時代前夜に学際的アプローチ―考古学分科会のまとめ―」『復帰25周年記念 第3回沖縄研究国

際シンポジウム 世界につなぐ沖縄研究』同シンポジウム実行委員会 二〇〇一年

高宮廣衛・ほか 「百済・統一新羅時代遺跡出土の開元通宝」『沖縄国際大学社会文化研究』第四巻一号 二〇〇

〇〇年

高宮廣衛・ほか 「琉球弧および台湾出土の開元通宝―特に7〜12世紀頃の遺跡を中心に―」『南島文化』第18号 沖縄国際大学南島文化研究所 一九九六年

高宮広土 「古代民族植物学的アプローチによる那崎原遺跡の生業」『那崎原遺跡』那覇市文化財調査報告書第30集 一九九六年

高宮広土 「沖縄諸島先史時代の植物利用―貝塚時代後期を中心に―」『考古資料大観』12(貝塚後期文化) 小学館 二〇〇四年

高宮広土 『島の先史学―パラダイスではなかった沖縄諸島の先史時代―』ポードアインク 二〇〇五年

高良倉吉 「沖縄原始社会史研究の諸問題―考古学的成果を中心に―」『沖縄歴史研究』10号 一九七三年

高良倉吉 『琉球王国』中世史選書 吉川弘文館 一九八七年

嵩元政秀 「『グスク』についての試論」『琉大史学』創刊号 琉球大学 一九六九年

嵩元政秀 「沖縄における原始社会の終末期」『南島史論』富村真演教授還暦記念論文集 琉球大学 一九七二年

嵩元政秀・安里嗣淳 『日本の古代遺跡』47沖縄 保育社 一九九九年

玉城靖 「総括」『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅳ』今帰仁村文化財調査報告書第26集 二〇〇九年

多和田真淳 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『沖縄文化財調査報告 1956年版』琉球政府文化財保護委員会

一九五六年

知念勇 「貝塚時代後期研究の現状」『考古資料大観』12 (貝塚後期文化) 小学館 二〇〇四年

都出比呂志 『前方後円墳と社会』塙書房 二〇〇五年

樋泉岳二 「脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の環境と生業」『先史琉球の生業と交易―奄美・沖縄の発掘調査

から』熊本大学文学部 二〇〇二年

土肥直美 「人骨からみた沖縄」『沖縄県史 各論編』第2巻《考古》 沖縄県教育委員会 二〇〇三年

東京国立博物館(編) 『日本出土の中国陶磁』東京美術 一九七八年

當眞嗣一 「沖縄のグシク」『考古資料の見方(遺跡編)』柏書房 一九七七年

中島恒次郎 「大宰府と南島社会」『古代中世の境界領域―キガイガシマの世界―』高志書房 二〇〇八年

中山清美 「境界域の奄美」『日琉交易の黎明―ヤマトからの衝撃―』(叢書・文化学の越境⑱) 森話社 二〇〇八

年

西園勝彦・井口俊二 『屋純遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書143 二〇一〇年

藤本強 『もつ二つの日本文化―北海道と南島の文化―』東京大学出版会 一九八八年

文化庁文化財部(監修) 『広田遺跡』『月刊文化財』二月号(五三三三号) 二〇〇八年

宮城弘樹 「グスクと集落の関係について(覚書)―今帰仁城跡を中心として―」『南島考古』第25号 沖縄考

古学会 二〇〇六年

宮城弘樹 「南西諸島の水中文化遺産の概要」『第2回日韓共同水中考古学研究会』第25号 特定非営利法人ア

シア水中考古学会 二〇一〇年

宮城弘樹・新里亮人 「琉球における出土状況」『十三〜十四世紀の琉球と福建』熊本大学文学部 二〇〇九年

宮城弘樹・具志堅亮 「中世並行期における南西諸島の在地土器の編年」『廣友会誌』第3号 廣友会 二〇〇七年

盛本勲 「グスク時代の幕開け」『日琉交易の黎明―ヤマトからの衝撃―』(叢書・文化学の越境⑰) 森話社

二〇〇八年

吉岡康暢 「南島の中世須恵器―中世初期環東アジア海域の陶芸交流―」『国立歴史民俗博物館報告』第94集

国立歴史民俗資料館 二〇〇二年